

(訳文)

ベルリン、2011年1月

## クリスティアン・ヴルフドイツ連邦共和国大統領メッセージ



日・プロイセン修好通商条約（1861年）調印  
150周年記念式典に寄せて

（「日独交流150周年」関連行事）  
東京、2011年1月24日

ドイツと日本は、今年、外交関係開設150周年を祝います。1861年に日本とプロイセンの間で締結された修好通商条約は、決してすんなりと誕生したものではなく、交渉は数ヵ月にも及びました。それでも最終的には、双方の調印にこぎつけました。条約には、第一条に注目すべき一節が盛りこまれています。「相互の所領臣民の間に永久の平和懇親あるへし」というくだりです。

「所領臣民」たちはこの条文を実践に移し、続く数十年間、ドイツ人と日本人の間には、相互の親近感に満ちた多くの交流が生まれました。両国国民の友好がいかに堅固なものであったかは、第一次世界大戦で明らかとなりました。日本とドイツは敵国同士でしたが、捕虜として日本にやってきたドイツ人は、憎しみではなく親しみをもって遇されたのです。徳島県鳴門市のドイツ館は、当時の人間性と他者への敬意の証であり、訪れる人に感銘を与えます。

残念ながら、この二つの特性は、第二次世界大戦ではめったに見られなくなりました。両国は、暴力の道に迷いこみ、他国ならびに自らに甚大な不幸をもたらしました。しかし、第二次世界大戦の惨禍を経たドイツと日本は、民主主義のもとで再出発し、多国間協調を指向する平和国家として復興を果たしました。法の支配、民主主義、開かれた経済体制が枠組となり、両国国民の勤勉さ、能力、意欲が開花していったのです。これも、両国の人々に共通する経験です。

ドイツにとり、日本はアジアにおいて価値を共有するパートナーであり、政府は緊密に協力しています。ここでは、協力の例として国連改革、世界の軍縮、開かれた世界貿易体制を挙げるにとどめます。しかしその協力関係は、政府間の協力をはるかに越えたものです。両国の市民社会は、緊密な交流のネットワークを築いています。ドイツ人と日本人は、今後も互いから学び、ともに学んでいくことでしょう。少子高齢化にはどう対処していけばよいか。経済活動を行うにあたり、繁栄が次世代の生活基盤を壊さないためにはどうすればよいか。いかにして近隣諸国や世界と平和に共存していけるのか、等について学んでいくでしょう。

節目の年が、これまでを振り返るとともに、将来を展望する機会となることが望まれます。多くの行事で「神々の美しい火花」に魅了され、協力に加わる人の輪がさらに広がることを願います。私自身も、ドイツであれ日本であれ、行事への参加を大変楽しみにしております。